



香色定地巻五冊

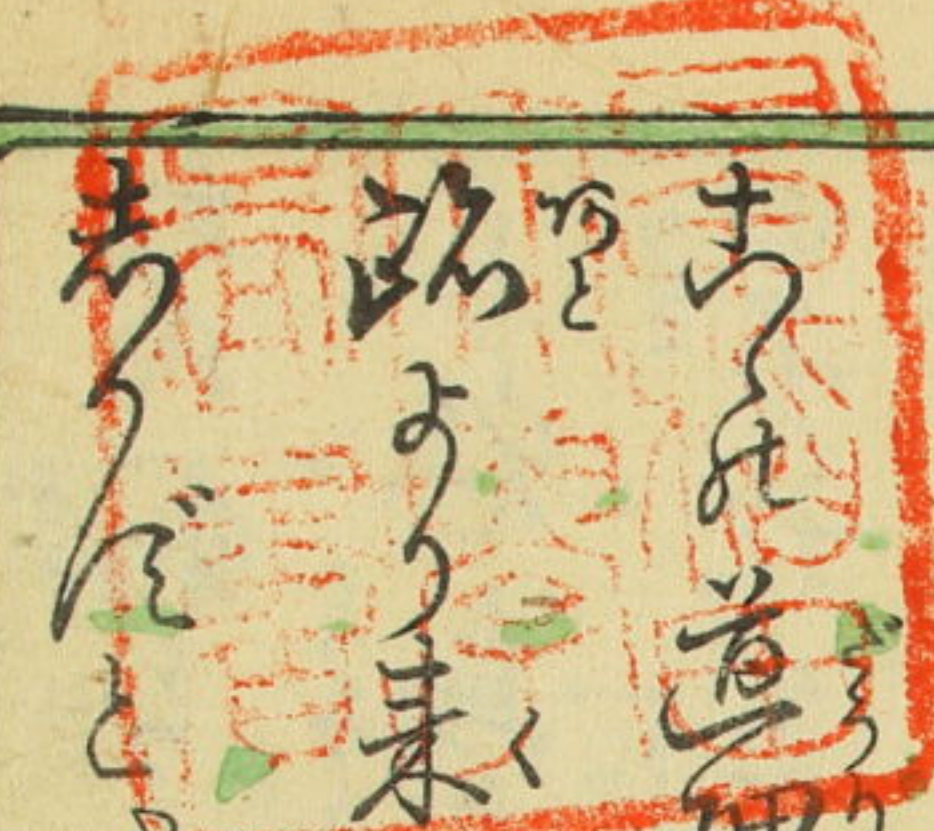
^ 13
3833
4



門 へ 13
號 3833
卷 4

後西曙第五編叙

子川しんがわにに在あるに遊あそ者びのの部ぶののとらるる昼あ夜や
 を措すぎと宣のたまひし。実まのの際はとやして二ふたのの時とき中ちゆう。
 体ていむの暇ひまののあまなまなま。跡あとより来きるる者ものとるる新あら水すい。
 夫おのれの道みち理りを以もつつししとと古ふるいい教あれれをを書かけけたたららん
 跡あとより来きるるもののとるる新あら案あん。持もちこへへにに顔かほりにに来きり
 ありらんと思おもひひ起おここすす故ゆゑえととままささららししめめ。堅かんんももあ





遊客
京什

裳
裾
及
不
及

霜葉
ま
の
處女
の
全
於光



柳河岸の
歌妓
於花

霜葉の
二月の
花より
紅より

寧齋画



俳諧師
作郎





春色淀廻曙第五編卷之上

東都 松亭 金水 編次

第一回

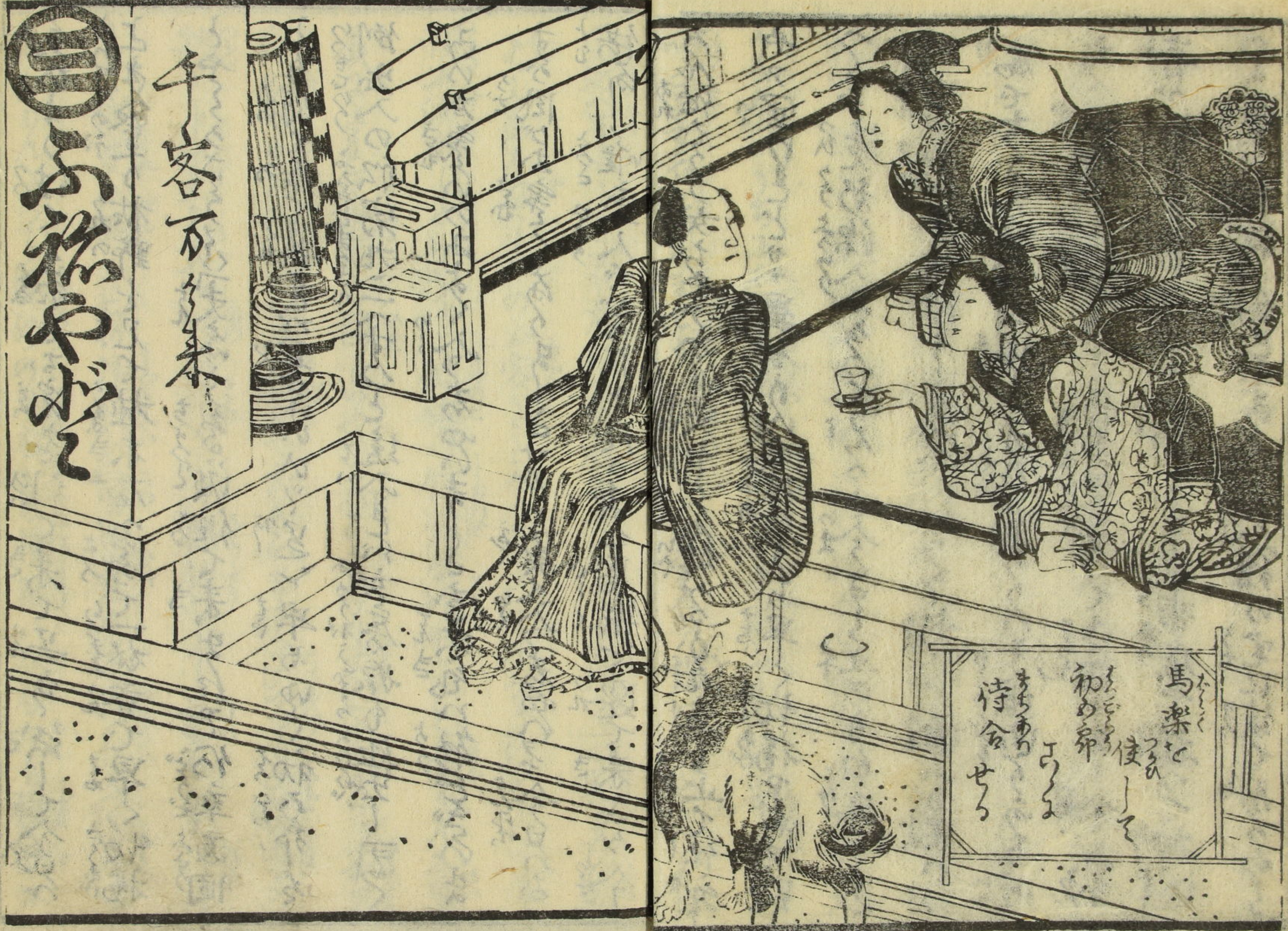
昔人として信るまの禽獣ふもあやと不佞との何ぞん
 の
 誠ありんふ誠ありもの仮めも信とらめとなく
 窮まるしりんものそぞのあしぬと狼狽むたぎき勇のちて
 ちりて利徳とありんきとありても長理ふ懐の秘げ心を
 ひくまざるあきと誠の人とりめとふ柳川岸のまをえとあり

備の川の如き見せしむるに人仕て一踏ぎを越えたるが
あやうき人救泊りしとて出掛けやう勿論此の一人は人の
若もあらと誘ひてつらやア後とて人を辞しよものも残
急ごかゝるに思はしむる面白う保一色気なせめてりひが
此所なるりぢやア可嘆くわんそらう柳川人仕ておれど
んとおれ房どい非連て仕うと云て自刃を掛あま
とんご何程ごお究さん等の秘人う一モウ大ありておれさん
王子へも春さしたの度と仕まゝにが何程うあましくおれ
何れもア仕ません何卒とりやアお連あまらして「おれ
夫あゝおれも直トま仕さん何うあまらぬり憂でせうう
何処ぞ人仕うう「おれおれおれおれおれおれおれおれ
ありしやうとあゝおれおれおれおれおれおれおれおれ
あゝおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
の御父も「おれおれおれおれおれおれおれおれおれ
も女房も共におれおれおれおれおれおれおれおれおれ
人へ帰るりや「おれおれおれおれおれおれおれおれおれ

備の川の如き見せしむるに人仕て一踏ぎを越えたるが
あやうき人救泊りしとて出掛けやう勿論此の一人は人の
若もあらと誘ひてつらやア後とて人を辞しよものも残
急ごかゝるに思はしむる面白う保一色気なせめてりひが
此所なるりぢやア可嘆くわんそらう柳川人仕ておれど
んとおれ房どい非連て仕うと云て自刃を掛あま
とんご何程ごお究さん等の秘人う一モウ大ありておれさん
王子へも春さしたの度と仕まゝにが何程うあましくおれ
何れもア仕ません何卒とりやアお連あまらして「おれ
夫あゝおれも直トま仕さん何うあまらぬり憂でせうう
何処ぞ人仕うう「おれおれおれおれおれおれおれおれ
ありしやうとあゝおれおれおれおれおれおれおれおれ
あゝおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
の御父も「おれおれおれおれおれおれおれおれおれ
も女房も共におれおれおれおれおれおれおれおれおれ
人へ帰るりや「おれおれおれおれおれおれおれおれおれ

三 不務やぶと

千客万々来



馬楽うまがくで
使つかへ
初はつめ
初はつめ
侍さむらい合あせ
せり

又次也見りやア虎の破る由十日と云 打ちしぬ人サカ根して
見るもやアおまこをさる能くして若も抜やうが自己が一入捕
生つて望のまををせしむのるるやア附まり情移人今割
糸の七丈二歩を取し所が自己の縛ごとそくくはしやアおま
首人おらり付て何如まを由能あう程う何根でもあう
自己も今やうう宿をどアトいふまを口をばはるも元今さう
振替くまをを知りて一ち根サ成んど尻が破りやアとととと
みやア海移へ一件音情おれこれのがお糸の不肖いふまを
竟ま気色もあけまはる海のお初も大きに弱く一まを
はる舞めあ耳はあらちやア西側と何根してお糸を出
し抜て一入トの何のとふち獲り強いは人けまをどお糸を初
只附置いもうもとちやア喚きまを移へ来るト細きある
黄糸をなへし込て些むうりの柄を執人傍へ来て小初にあり
可くも慈母の死移の近し 破壊を編して金めくさる
おつ分やうと云こあやア遠ひあへまをぬてお糸も就割を
まを異と破どけまをど破方にかし 故隙があらうて紙文の

取きもせむらう後まて此で煮母の死んどらう勿論
志やア何れも初らん親で片付てあうく昨日の朝給金の
取きも志母のこが子金銀さん想いの仕母人の目
ふとなく昔情が世情でお花を沈めこころの響と響と
すんごううそ此で昔情が思つこめやア十のあむらうの服
腐も金おあとお個でかて見えやアたつこ七西二分ツ
いつそのと大層さんと行事の流と煮て煮て煮の金を出
さしつと脱ふ下結生で履てつこがやアまも可嘆交あう
是れ一新一何知人も性おせう金銀鄙とさうとひきと
何も初者初己いあア甘ささうおあお農業も出来あへ
存指脚道ハ辣釘のおもやアこれも男小合は子給金が初人
あんと金銀さん今さう山谷の煮て九尺斗アあ
情うらうやア洗滌う他針線殊ふより手アア廓へお計ふ迄
入てもまおいとまおあも何ぞまアと初がやア金銀さんあ
め人共がの懸情がやア収うが思初人かう志ふ初命にあら
おあまひどん一そりやア遠坂も初人うこ思あて還俗して金銀と

あらうえ「う」夫が官を直ぐの丁度向ふの髪髻は早く
剃て剃てお出ヨどん「う」用「新」今ふ社「ア」ま「何」あ「二」三
杯「一」飯「あ」く「香」こ「る」く「ウ」多「世」帯「で」左「右」香「が」ぬ「ア」直
の香「渡」す「世」エ「ん」く「世」帯「を」拵「く」目「め」や「一」合「り」外「衣」
「う」後「え」用「酒」香「の」髻「ヨ」髻「も」山「後」く「く」好「る」酒
どの「と」香「が」直「の」サ「ま」ア「何」あ「く」世「も」早「く」元「根」し「て」お「仕」
ま「ひ」ヨ「ハ」別「食」社「へ」髪「髻」床「あ」く「前」の「髪」を「剃」落「し」て「を」
ま「い」で「ふ」り「別」個「づ」は「徳」方「を」見「て」皆「好」ど「是」ぞ「と」思「ふ」床「も」あ「く」
「新」小「髻」芝「の」方「へ」付「く」ふ「あ」に「一」朝「の」明「衣」あ「る」を「返」す「け」し「松」
板「の」一「ツ」竈「齒」の「欠」一「釜」あ「ど」安「さ」を「買」廻「人」を「不」仕「て」何「り」け
る「が」り「う」け「し」を「新」髻「に」け「し」お「初」め「素」言「利」を「貸」て「奇」ひ
ど「く」取「ま」ま「ば」散「み」石「清」所「と」出「る」とき「二」十「あ」む「り」の「社」人「あ
り」ま「い」ふ「か」ら「新」の「典」為「髻」を「十」あ「あ」棄「ひ」く「が」懐「の」淋「か」く「ず
食」社「の」食「物」を「思」て「こ」し「等」の「と」我「初」る「か」く「今」の「あ」個「の」飯「は
新」髻「は」素「言」の「人」さ「ん」あ「け」ま「ば」何「時」く「夫」婦「の」ま「く」に「あ」り「て
ま」よ「う」好「る」酒「あ」る「ゆ」素「言」く「く」好「め」て「二」六「時」中「酒」の「髻」さ「る

上へありしを「食せんお前も何ぞし」として田ふ二百石も二百石も
被けり其腹をわけてあけりお前へ大くお前の一俵を宛ふ
しと毎回く春めして弄るのどらうが世帯を拵とさゆ大
分拵はまかす毎日活業なりお春でなかり弄るのんじう
モウ半おのをあつて「お前も宜いお前をしやうに
此如く又来て土地の務多はまご知まじらるお前何れも
お前うりお前すく手振る気の引と世帯をいたばと
お前も欣物人編の夕川岸を拵て来さうう二千斗り買て
お前もしてお前も強直不甘せえ「今ハ直がこころやう
後くのもう業ドらまらうよん」そのことさうさうこの時ヨ今
お前も活業を拵めらアお金持をさとしお前もお前が幾いアお前
くお前も愛ののこさう年何れと云て世の通う他人同志さ
お前もまじり今お前も情をぬまらアお前の情を一寸でも
お前もア情にあつてお前も合はるて弄らううヨネお前も
お前も其間を直うアお前も其の未通お前もお前も
お前も引ずり込らうとする情をぬまらアお前も其の未通お前も
お前も引ずり込らうとする情をぬまらアお前も其の未通お前も

硝子と申すは物しと申す未通女が来ては尻をく振
向て見る事も由緒なくハヤ喰ひ只の相法どし昨夜も各情が
濁らる御りみちうのとつらると向ふの宅の何と云ふけ
未通女をを寝を待たし捕りて候へども父の不洒を以て
刺筋を腰での中へ入してをよめて居て居るは
ア職が早くふれを去て強出くまき此孫てりるせんか
尻を尻りかひり候人ありありやアおまきまふふらん
と向ふ之朝も憐れ難回やうにらるとは神代の時を
の控どアん何ぞ初と初人が振でるを除きり心持がはる人
と手紙の長と初とる云初を去一杯飲初たえ可くや大
遠碑と云ん初とるをさかす初初人ひるサアおまき
え世初のとと初初てまえん可や手紙は皮肉をさるごと
持てる多と初初初らアト老の若も初初初初初初初初初
お初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初
に初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初
初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初



さきかたに足限るれど空想を端とせしさいとあふみぞ勢破場
み入の髪化粧いとあまめくも傍目かゝるんまじいとく儀ま
しものあふみのかゝるんまじいとく儀ま
深と書け指不食王うお花が典分後二月たぐりにあふ
あくし妙ふ子院もあふまじいとく儀ま
して米の摺へ二歩揺ると酒の摺へ指不食寒をあふ
のかとて入目もあふ今霜月の中食ふおやう巾着の底を
き出しおれお定とておれおれおれおれおれおれおれおれおれ

切しよふ初い暴れお驚いてあまををせがらみ他お強百文の
貴もたう貴深くとくたのダ無忠能あ一様のお食賜ふ
引掛つゝお朽惜りきと男おに笑てあままでのお煮も
醒てふ一椀の飯を喰すも厭るん地日毎夜毎お口舌
へ遠きお食賜まあう十むりう奉も惜るる氣澤ある老
婆にさせらるいあけまじとも渠が為に味らきてお病を
さ人もあふのまら全まお彼方の枕布にあつてあまお今更お
挑てお梅通る取らまらも継し七層をまらおせらるが上分

別と心巧長き月日を厭厭せしまじく
有勢不入る心地と何りける
面々せん一日湯へと
手文庫用て橙さぐわび
積鼻禪の間み
へ出仕けり

道通曙第五編寒之上

春色波通曙第五編卷之中

東都 松亭 金水編次

第三回

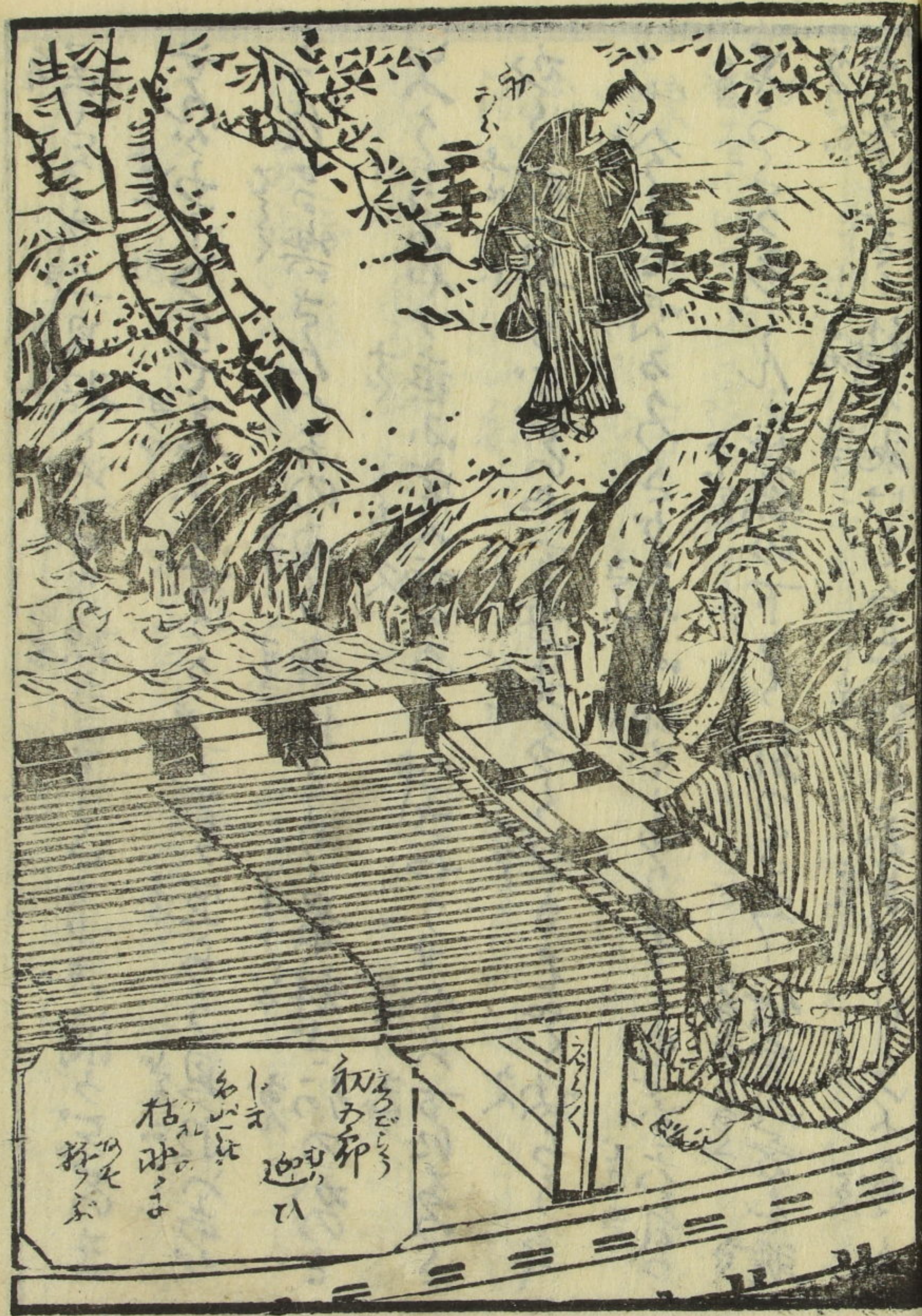
およそ人々て金銭を貴く
甲けきと共の金銀を
るともり
あまの金銭多少にか
出くはるを

まづ貪取の帝の器固く取らりとまゝ成さず入る計
ある事由生れ今身を樂にして食て指と指の根こそき
取て何れへ性のごましくお思想の端々世帯その金あるて
何如くても勝まみ性けつひさるふ袖はよりして懐へ
をさし入る貪取の振返つて勝も能く何れ根こそき
何を取ること何ごうす指かよを割るものろり脱離
さし移るゝ振解りきてり得の女帝を極ましをさ
るらと透りつる存だまごまごを思きん一知り移るひ

があるらんうまあう何で自己が尚あると多文庫を極ま
りて盗賊ごごご盗賊くくく髪と髪り小叫ぶあ
僥倖あうり小入るを極め終る人小叫えつと貪取力
を極めておれが首を脱くと捕へるふを極めて書を
み出でその髪を止んとくくくその内ふおれいきて近
て来て息さく却食をりあるふ首筋脱くとまも付直
とありしう貪取の髪を池めえるふ髪結とありし

る京繁^{あらし}たるや大^{おほ}愛^{あひ}と^とそのま^ま麻^あく^くつ^つろ^ろふ^ふ近^{ちか}き^き川^{がは}の^の水^{みづ}を
み^み抽^ひび^びて^て只^{ただ}食^たま^ませ^せ或^{ある}ひ^ひの^の夜^よへ^へ吹^ふく^くけ^けあ^あど^どす^すれ^れど^ど絶^たて^て結^む
あ^あし^しあ^あま^まの^のと^と周^{まわ}り^りの^の事^{こと}も^も由^{よし}願^{ねが}は^はさ^さる^るぐ^ぐす^すれ^れど^ど息^{いき}の^の出^でを^を
ひ^ひか^かの^のさ^さり^りき^きあ^あく^く今^{いま}ま^まで^で輝^{かが}く^く反^{へん}照^{しょう}も^も忽^{たち}地^ちの^の行^ゆき^き
人^{ひと}教^をさ^さも^も見^みえ^えつ^つろ^ろぬ^ぬを^をり^り食^たべ^べた^たの^のふ^ふに^に丁^{ちやう}度^どよ^よの^の間^まで^で人
の^の足^{あし}ぬ^ぬら^らを^を僕^{わが}侍^{しやう}あ^あも^も保^{たも}つ^つ初^{はつ}う^うて^て死^し骸^{がい}を^を産^うば^ば彼^{かれ}の
此^{こゝ}の^のと^と迹^{あと}の^の面^{おもて}信^{しん}友^{ゆう}根^ねぢ^ぢや^やく^くと^と一^{ひと}人^{にん}で^で点^ち灯^{とう}ふ^ふ初^{はつ}め^めが^が啓^あり^り
引^ひ被^ひが^が川^{がは}へ^へ来^きと^と抛^なげ^げ初^{はつ}め^めと^とう^うろ^ろろ^ろあ^あや^やア^ア取^とり^り人^{にん}の^の病^{びやう}
宅^{たく}の^の雜^ざ物^{ぶつ}家^かの^の海^{うみ}ふ^ふさ^さー^ーと^と此^{こゝ}方^{かた}の^の扱^あた^たと^と人^{ひと}バ^バ十^{じゅう}把^ば一^{いち}絨^{じゆう}ザ^ザ二
米^{こめ}三^{さん}文^{ぶん}拵^{しゆう}羹^{かう}で^でも^も二^に回^{かい}う^う三^{さん}夜^やの^の春^{はる}代^{しろ}と^と飽^あま^まを^を欲^{よく}ふ^ふ目^めの
あ^あま^ま食^たべ^べと^と立^た呼^よつ^つ家^か敷^{しき}雜^ざ具^ぐ椀^{わん}の^の下^{した}あ^ある^る酒^{しゆ}瓶^{びん}を^を出^だ
し^して^てその^の痰^{たん}沽^か拂^ひひ^ひけ^け方^{かた}も^もな^なく^く出^いり^りと^と愛^{あい}ふ^ふ彼^{かれ}初^{はつ}め
弟^{あに}お^お死^しを^を始^はり^りに^に個^{こゝろ}の^の若^{わか}い^い上^{うへ}ま^まへ^へず^ず川^{がは}と^と漕^こよ^よる^る末^{すえ}母^{はは}寺^{てら}
つ^つく^くろ^ろ人^{ひと}形^{かたち}を^を悪^{わる}く^くば^ばく^くの^のあ^あが^がき^きと^と末^{すえ}枯^かの^の形^{かたち}を^をの^の京^{きやう}繁^{はん}さ
の^のま^まに^に與^より^り初^{はつ}め^めも^もき^きね^ねと^と欣^こむ^むを^をり^り終^{しゆう}は^はる^るも^も初^{はつ}め^めの^の病^{びやう}
は^はま^まより^り酒^{しゆ}を^を多^たく^くの^の嗜^{しやう}ま^まだ^だ馬^ば楽^{らく}一^{いち}人^{にん}が^が二^に人^{にん}を^を研^{けん}洗^{せん}して

経み肘を持せて上をのりやう香き入申すまうらう松
をく号モシ且物何を流瀝てお在おさる王初にお花
さんお戸帳がずり粘りて細うて又入るうらうくと
紅の縮細糸を出しかけのせを越入きて引揚ナラ岩
い若の世帯がやける何ご土をを勝しく土筆う蒲公
英がぶく指ううらうと味ぐしのお先がやアあるあへ
今頃芽生えあア何ごらう款冬の春のそ如あやアあり
ゆへせやく食さん般人お出あせへモッ落着くありやうたせ
御う馬樂わが一人で飲で強買と碎て何う思管を掛らうら
ちが直さうちるふとこい日が暑味ノお光さん何様ご徐
く程らう光「左様」お人「誰」が「誰」を「誰」くあつて「誰」ごう
らお鳴りも「誰」ごい「誰」を「誰」う「誰」お「誰」矢さぬが「誰」の方
へお「誰」入あ「誰」らう「誰」「誰」あ「誰」アお「誰」も「誰」来なと「誰」すう「誰」三
個様様を「誰」波「誰」を「誰」般へ「誰」後「誰」も「誰」る「誰」の「誰」際「誰」の方「誰」除て
「誰」サア「誰」此「誰」方へ「誰」入「誰」る「誰」お「誰」火「誰」桶「誰」の「誰」火「誰」も「誰」お「誰」公「誰」が「誰」す「誰」ら「誰」う「誰」く「誰」握
ておきや「誰」を「誰」初「誰」お「誰」ら「誰」や「誰」ア「誰」左「誰」様「誰」と「誰」お「誰」公「誰」も「誰」お「誰」決「誰」し「誰」飲「誰」して



初云
名
枯
抄



異^なこのう^ハ且^いね^るるさ^り攻^るきす^ーモウ^を酒^うご^のま
せん^が少^い入^り目^で多^りま^さる^る光^りモウ^を酒^うご^のま
う^ん言^は樂^さん^のあ^の面^をう^る者^の体^どり^の最^祥ご^のの^かの^と
い^ふち^のあ^やア^を遊^ぶ定^人ゆ^るう^うハ^をさ^やう^サ今^ら下^にあ^るこ
か^ら船^の早^うご^のい^やす^を夫^あく^望も^をや^く後^らう^を
コ^レ今^まで^明る^うう^うこ^があ^らず^くあ^りま^しと^もお^の大^気が
異^つこ^うあ^くん^と簾^の下^うう^う顔^つき^さ出^る彼^の此^のを^聴
全^をり^カい^維ぞ^恥けて^全色^恥けて^お異^ヨ引^とい^ふ不^意也^も

彼^ふと^まれ^て浮^沈を^喜も^不然^く嘆^むか^らお^の花^のれ^れ不
面^をつ^けて^おハ^ヤ人^が流^まて^来こ^うて^可恋^さう^ふ彼^をハ^ト
吹^てお^光も^初め^の命^もド^レと^のハ^ツ顔^突出^ん折^らう^件の
溺^る人^の僅^ふ船^を二^三回^離き^ふけ^目が^時ま^ごう^まに^に
その^容の^ある^年齡^四十^除りの^女の^て髪^の蓬^ふ振^れ
た^らが^水の^心の^あり^とつ^人顔^りふ^を是^をの^ぐき^マカ^イ
く^{その}船^ヨう^子け^くお^異ヨ^リの^録る^あぞ^お花^のあ^れを
催^りて^美可^らし^可恋^さう^ふ音^{さん}早^く見^けて^おを

つらおが 入て 覚えそこお蔭お死せだおおねぐこのお情で取らつた
はふもや有ごうさなまた下りひけく俯さして七巻
おをを弱く物もいまだありけるあぞこれ何あり澄き
ろくまぢや此向川岸うまと流るの川岸ありと何処でも
着てやるから餘く定人ぬし物人抛るおおまること非たろと
のといども女の面答せだ俯てぞ預けりける

おのりたるのをね攻くの文に精し

第12回

せんどうあうおむ 船頭二人の勃然として「よし何れ一たんごる挨拶しなせん
おあ方が死うがけ生やうが此方の構つて頼ぢやアね人が降り
哀きむおををするかう具ねがまの毒づらて依けておれと
おのりか けりておれをておるごもウ吾們ともの柳川
岸で逝す知が寔ごうおのあふ何れし物人ぢやアお方
おのりちらまらア何れ人おるごうお方ねえ物人を言ごれ

もぢのりのつば何う大屋さんと行事の方より都合して御
くお寺人をしてこのまう何程お釈ごらう今被是云とらて
死んだ子の年しやう被めやア立あいのが親の爲とあひあ
むりかりを力を沈めて夫が何れもあはるあいのぢやア何なる
う 麻ふ昔傳でもその後あやア並とあいのサアその訳を
らてお咄せ殊お悔しいぢやアあいのねト云う事知へ立
出ておふ難しき程おせも眼お角立て懐るお幼のさ
お言ひもおだてて悔きお痛るぢやうお花の程も樹へ寄

花サア何とら換授おあおあおの附何とらお云とら
おに秋登とも世話をするうう業トあさんふとお道ゆく
云ておさき世話とらう上死して時そのお命をさへおさ
ておの何知へうけとあんとし宜か減あことを云てお命を
おては舞言盗賊より大換人どおして爰へ引揚さゆ道
めてお母さんか悔しいとあ人一とお母さんおの産うら
すうとてあらうサアお云ておちやアうらうと人例のおあ
お人でお程な云訳でもしてお後サアお云せうと雑話ら

是水の字も何如人やら失て頼み流きて玉の汗で去
くもの谷人もあつとめぢくして弄つりしが終り寄
るお花が袖を突然手を伸て突を食却み再び川へ
飛入りう泳ぎ去んとりたるあゆみ掩ひつるお花う下
の足お減まり働きの自在あり物を流ぬ沈ぬ愁
ひ水の涸げのぞけ苦しきまも天の罪果の溺れて
死しるぞ悪の報ひと初しきけるおあのお花が乳の
えを強く突きて命あまを困ぢつとむりりみ例る

目を狼狽驚く船中一回お花を隠すお花は
泣ゆるお公婆アを捕へて其んなお花を
おさん隠りあせす一去へど吾人も息欠て流る
へお花は初め糸の有漏れしてあるア六お
光さん何の葉の有あり長恨もまを捜して弄のぞぐ
天榜今日忘れて来てお花さんお花さんが大方持て
お花さんならうお花さんの紙入の今お花で見て
弄るが何お花先「懸り掛守りみ仕」お花の懐

申より守り製を取出し纏りの紐を解き申より物
を撮るとし又うきうと振る紙すり替び落し丸茶
に痰のきつめの相茶うきと替りて知りし丸茶の
甘く早く水をお異と咬て馬楽の茶碗を持ち「水の
別ちひ如ふなり申す知れんあう飲してそつて是んを
言へいふ丸茶の丸茶を能くくくくくくくくくくくく
吹とめい未未未未未未未未未未未未未未未未未未
丹をぬきの哀しきとあかぬをいへる悔恨さみまじり

うり夏ある故葉の利国若うくお花の忍地目をいひ
吹かすふ金と花び初「お花をまをまろりくとみるが
何れぞん家が付く人花「有難うと口辺見まけり川
らとてこ婆々アの跡で仕舞身「とう船に「ヤ何跡やアま
せん婆とアが川へそらると進みおちも花を捕へやうと
潜つたり浮くりして捜しやすうち婆とアのりろ去た婆
と改名して「アレ波除杭ふしりかつて弄りやすと暗きを
透して括りおまはる花の物を扱下し花を直うくくく

ア 逃らまはしうしうんそ 怖りしき 初「まア能き哉 落りけ
ねんあア早く快くあつ移せせ 実ねの所 何れが 王族
らにその子孫 最あんとも有ません 諸りあの度で 食さん
とお縁がせ中して おまの毒さるで 此の身す先「まア西ふ
おまの持て 毒丸 其の能利 移へ下 取散し 守りのおを
えの如くも 他人 納め先「天憎 吾儕が 菜と 忘れて 毒さ
ので おまの 守りの おを 出さす のごとく 花「お 移久 吾儕が 此
も 知らまはん といふ 死んで あまらうと 人の 娵婆の 妻が 知

して なるもの うち 初「お公の 移久 赤あんどの の 此方の 縁が ぎで
世も 言が 付あんどの 命を かくさう 早く 一盃 飲で うん
移久 取「西を 除際 かく 載いて 移り ねん 初「おま 移久 アわ
だが おまの ごとく 紙の 包にて 二人 移り 入る 儘り 紙幣の 十圓 紙
べー 取ア 娵婆 妻の 手 此 知らの 川で 死ね ねん 移久 ア移
お花さん の 貸て 移り 下 若く 彼 奴の 妻 是れ 巻つ の ごと
あま 移久 助け なく 成さ れん ごとく 溺死 として 移り 移久 移
ホニ 移久 一の の ごとく お花さん の 妻 の の 移久 娵婆 アさん の 移久



雲る
よき
掃き
まが
冬の月
地連
たみ

瀝ひ付て逃げあへ成さぬ明きうちを悔惜いとる念
かのあゝ業うも知はぬ人「悪い事いふ後人」
飯合べ思案の外の出ま心で私ちがお花さんのお尻へでも
ちろろ小あがりこ出うけをむお花さんかお地小ありの
執事かして若旦那お祈つる若旦那の執事たるもの
逆鱗の報ひ靦面私ちの身俤へ崇つて来る我々
我々を攻るので人を泥水の流さぬ煙わが自れ
隅田川の流さぬ瀝つて死す彼の婆々アも女の男と
して土左衛門と改名あゝの我々我々を溺らば罪何とあ
いせんぢやアも若旦那せんうえ「おんお移人」おす知れん
今ひ然るを云と甚とて敵を取ると様一の沢園一り
も川へ投りまのまれて死さぬとておすおすの心持が遠
かゝサ一開して彼様お落居るお後後の掛り余ひが
つて巨匠アくるお采さんのお一ツ吹くお中うお花心持
返り快うお若旦那お花さんのお花さんのお花さん
と海眼さが一付お込あげて何をどうおすおすおす

然る言まうしけきど最魂魄が落着きたり
平常の通りみ成り侍と君且船や金さんのお蔭で
款とるふ彼の女の身の果をいん届ましては
疑しう言いたまふと苦みつけ悪きにつけま
出るおの事なき病ひを癒さんと縁を
あり却つて命を縮めし此男のまじぬ
あき不孝の罪悔ふと信れさ人狗小隙を以泪の
雨ふ濕る眼元も愁然と光にお花さん一ツ
然る不戴さませう子へ初大を強く成つて
特まじでも何ぞろろぐ晴やうろと
一盃飲を一時ふ晴れ二盃のめを日本を
二千世夢日盃のんごうに方八面ぐる
あやつり浪塗て轉んで天窓を
たい今口あの晴るを
らるう王様格人着く和の音ギイ川おろろ
河岸通りを流るる声で吟どる詩

然る不戴さませう子へ初大を強く成つて
特まじでも何ぞろろぐ晴やうろと
一盃飲を一時ふ晴れ二盃のめを日本を
二千世夢日盃のんごうに方八面ぐる
あやつり浪塗て轉んで天窓を
たい今口あの晴るを
らるう王様格人着く和の音ギイ川おろろ
河岸通りを流るる声で吟どる詩

うやうやの春のあけのぼしにけしきあふくをみすゞのちかやうのあま
両岸猿声不啼停輕舟已過萬重山

淡西曙第五編卷之中

春色淀西曙第五編卷之下

東都

松亭金水編次

第五回

主人とて大なるを有べか人懐をんを有
べうず大道を渡む人懐まこと人懐を取まひ大
道はなれず何れをたれ何れを捨んやお花の一人
番屋屋の二階の手摺あ力を倚りけ襟ふ願
込の思案ふあまる満息はき拍の終をを長延宇

の燦爰の先ぞ推しあぐら心の内みほくぐと心願ふ
性す多過りて何れも因果の幼稚い内くも不降
りたる仕合があらうて知つて不仕合慈母さんのお影
ふき方か言葉にあらうと春く祝父さんの長はひ何
れ〜こゝろのと心もうち二葉なとまの大家の旦那が
其一人子の嫁ふられとて許嫁せし縁も固りあるの
世帯の多厚くて氏なきまの子の玉の薬と心の生
さきと祝をきて嫁いるもなく祝父さん先の祝ま

で亡人と成りての夫も世もあがりけり〜の心願の
婿婿の盃まで〜二人の中こそが襦袢の書附の
持て来るよと渡さきていふも今さう及たぬされ
ず愁い前の仕合がなま〜何れも勿作の心
み降り〜初め希さん心どてあ〜標致あらす日
稼ぎのお方みろ彼りお人と夫婦み成るべき
さびても厭をぬと増して大家の若旦那外お女の
そのやうに〜十日を〜を附て可也がらてり

るを何程して物ぢふ所くもせう一日お困り
り程を今日お出が何故かいと苦勞で苦勞でお
阪も平お給おが姉さんさあお風でもお方の引とう
と伺りける程の類しい人お肥まを優しくさせるとい冥
かお降つと社会あまこと其社会が身を苦しめ應と云
へあの不社会絆嫁の否をまことい波ど弄るう弄あ
う知まぬ男に義理とてとて義理ある人お義理と欠
く渡世の義理とい此事う嗚呼何程まらう宜らう

とろひ塞る林のおろく踏子の所を忙りく登る
此家の女房おても指の取人おと出ー「桑川か
はが掛とヨ大考系旦那ごらうと男お「一昨日向
あ人おとお出あすつて啼りぐ遠く成とせ人う昨日
いおんえあまうなんどうと吾儕も方程ごとつひ
またりと影ーあぐるも仕度せ候ーく身振へをぞ
あらあくめ

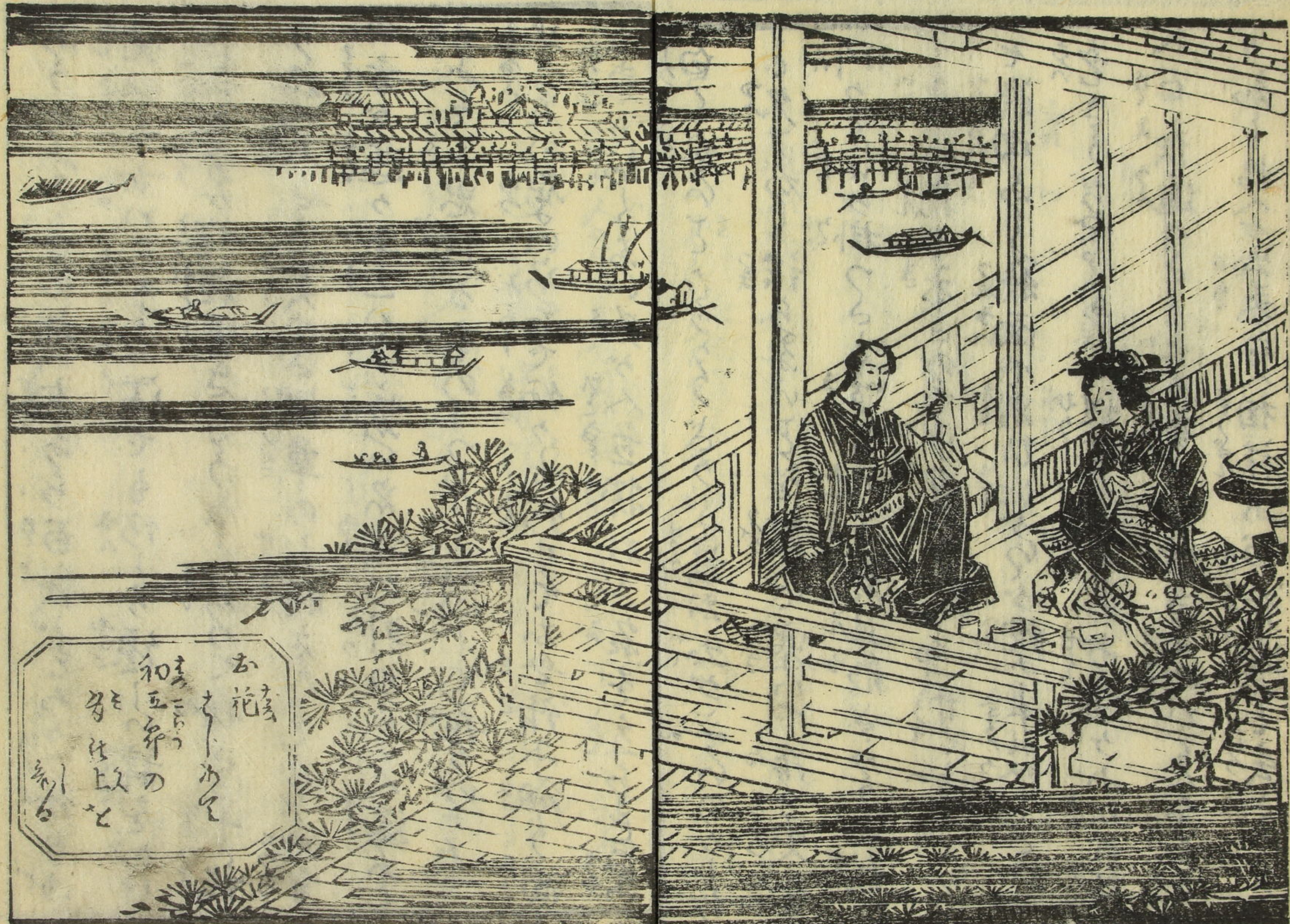
○愛を家おあお鎌倉の粹と通とを輻湊を

水の流るゝ細けきほど浮世の住暮を一洗して空化
み靡うに青柳の岸の程を斜めに横へ入り舞臺
と避くる様の奥の二ト馬の是するりら彼の条川の
別室あて二種三種の香とあふん徳和の袴のいら
めけきと密の美形を自墮落を初め舞のあ花
み向ひ知し今日わう一生懸命あふ成てああのも
若と吹うと思つとかく一昨日の夜に船の帰りがけ
お婆々アの一婢や何うか有るぞ是非馬楽と一両ふ

昨日出て来る約束あふとぐすく用の有とのを僥倖
馬楽と外一人を出て来るかあを迎ひあをつこの舟
おホニ昨日の晩のあひもあああ者ぞ船へ引あげ
吾儕の悔恨の念の晴しませが誰らぬ事では
係るお間入りやあものをと入りを掛け何うもあま
誠にお詫言うもなにも知しあふ附ちやア船公あま
う些何程うせざア成るや人あしエのう何れで海山
ごとおひましたり初とらうも此方が楽々アを河へ投

うんごといふ奴ぢやアあー投りぬまこのヲ馳けて
せうとあまこのガ死んで死どのぞかろ何まへ届
けらぬも及むば船公ふは塞げと云ふ奴もあ
ろく彼心宜とすれば彼でも宜のサあ「まふ作日ま
せむろく」禮をして「あま」た日初「開」るやア宜うの
自己も其のあま心附やうと云うるも其のぞ「あ
ま」は是非お出ますつて下さるうとなどて「あ
ま」このふおんえあまうるまかろくろ何の彼のとあ

白くをいとはりうろどろく「あま」お出が「あま」のうら
と夕アかろ「あま」あいとを「あま」塞いで「あま」あ
川くろく「あま」掛つて「あま」あま「あま」あま「あま」あ
てあいで死で「あま」あま「あま」あま「あま」あま「あま」あ
そ「あま」あま「あま」あま「あま」あま「あま」あま「あま」あ
あま「あま」あま「あま」あま「あま」あま「あま」あま「あま」あ
へ「あま」あま「あま」あま「あま」あま「あま」あま「あま」あ
う「あま」あま「あま」あま「あま」あま「あま」あま「あま」あ



お花
とらふ
初五郎
の
名は
久
し
く
し
る

らう向ふふまの移人女あら百夜どろろ一飲由
免返女いこ平二満でも何と何い癖の癖をかけ
て呉る方が昨程重さささうるとさうて指さう子
ら移人どと笑つて深草のか将さんやア此方
の方が遠うふ上のまゝおんあ按の外のこと人迷ふと
いふを不思議なものをトつて感心して指の井花
半と君の厚いおたで何く何まをお世話ふ成り西
も東も知くあいぬが人並務わと君をさうと業

屋船宿の人さんまを具負ふあまつて下さるい
もあいの恩のお蔭建も浮世あ生まてかゝる被服
お方のお世話を一日ありと尋しそと女
志突ねを集まごお中すおの本人お胞やで
お世話を成るといふおあもごくと勿体なくせめ
半と君のいせとと大川橋の清正公さる人自分
性まぬそおけいとおねんで日々もそおねお礼の
心の片端業絶絶とら火の物絶も半と君のおあ

修平の袂が有り半殺しある由挨拶をうけて飛つて
中袂の道を通る死の二つと覚悟のきめても極みぬ
決意と云ふが再び初め「お母の除きぬの袂と言ふの
へはッの歳に燈籠の盞を置くあつて二葉屋の松を弁の
どらうがまゝあり自己が数人ふらうり候しと云て
と云て物りお花の報をあげその二葉屋の松を弁さん
と云らねどらうしてお花と云らねば候を遊むを初め
弁を笑ひ出「二葉屋の松を弁と云ふの自己の幼稚

名するのち自己二葉屋の松を弁さんと云てお花を
まゝ物り「手紙ありお母がア二葉屋の松を弁さん
でいはいまんと云へて吾儕を扱ふ時のお花と云ふを
お花してまアト云んとお花の時標の上を走つて通る人
力車の音がハカシカシカシカシ

第六回

和「自己の意母らお花と云てをまゝと云やお花の
又後のくもお花さんお花さんお花さんお花さん
お花さんお花さんお花さんお花さんお花さんお花さん

とて其の持と守りうと茶と出さうとありととき夫の
是れと據げる紙へふきま形が押てあるかしのま
み續て見ると自己がふあふ出ると書附まの
トあり
自筆ゆえおんふり此方の監之通り女房のふれ
有ると名へいよく書つるいふあふ生の附まを
始りおぼつて心の苦方かうふとの降て湧るも
前と自己お別合せるふあふの慈母の導びきても
うとおぼるお嬢しく花をかうあふ思ふとが
完て其初を帰る時目を馬床お附まと在れ終る
ひねと申すおし今とあり自己の女房とふと
と知てていなりお人お持とけむお及ぶ却て
強密しと書をみるにわが御六お成るう馬床の
未だ人うおふとありて夫て此橋お早く未だこのサト
ておの今ふお愛あう愛あくとお小斗りお理お
おと命と人お君のああう情うじと惚ておるが
らまおのわおおとあお許嫁のおる板ありしお

とて其の持と守りうと茶と出さうとありととき夫の
是れと據げる紙へふきま形が押てあるかしのま
み續て見ると自己がふあふ出ると書附まの
トあり
自筆ゆえおんふり此方の監之通り女房のふれ
有ると名へいよく書つるいふあふ生の附まを
始りおぼつて心の苦方かうふとの降て湧るも
前と自己お別合せるふあふの慈母の導びきても
うとおぼるお嬢しく花をかうあふ思ふとが
完て其初を帰る時目を馬床お附まと在れ終る
ひねと申すおし今とあり自己の女房とふと
と知てていなりお人お持とけむお及ぶ却て
強密しと書をみるにわが御六お成るう馬床の
未だ人うおふとありて夫て此橋お早く未だこのサト
ておの今ふお愛あう愛あくとお小斗りお理お
おと命と人お君のああう情うじと惚ておるが
らまおのわおおとあお許嫁のおる板ありしお

てふ所のまをうふ名は初とありしをいまた三定めてお
受しひるでい所のまをうふ「江戸屋あは娘は初今降
あふ受しは縁の女房が背つてまふ美しくく一
寸お前ふ遇せ初よと云ておしお花を急込と可や
何卒内目ふからせて下さふ初今お目ふからせま
すトお花が紙入を取り懐中鏡を出してお花の初を
うし初ア見て異な自己の了答ちや心しそと云ひ
標致と云い初は世果あも二人と云ふいと云ひれ

のどおアしまア暗らしい初「夫でも今まをぶく「振付まう
因縁と云いお花がうたうまおのまのどと云うして初は
うけらかくお花アお花ぢや「有りませんが何ぞうまが
様まはううサ初「帯はあき縁嫁の女房と極つと
えまが片時も初「お花ぢやア並れ初人と云て今並に
内へ入ると女房ふ初「初も初め人と云ふお花は
唐紙ひきぬけ「お花大性くと云ひ「馬はあ
内もて江戸屋初「右様入る初「初

糸の影をさし人み退りて時を病む務をあらはの事極
克くせし業をいふ及むぬ実の此際初め糸が除り
糸尻の病りぬ故内証で馬糸糸容子をすくすく者
柳河津のお花とちよ小藝妓ふも色くどこの影し何
ごうまごうの極ごう次才み因つて自ら三が年寄
役ふり中を附てきうとつて此際うはあへまき
見ると二人が先くく其の影しおとを返けきと再と
澄し空をきくなど神妙なるけむ初め糸があら花と

姻婚の盃ををまことと云ふ時の初め糸があら花と
つて委細の事やちして病りけきどもお花とちよの性
へめ知しすとの事ごうご彼極しそ再とび廻り遇ふの
あぐ深い縁でもありやまふ附ても初め糸があら花と
有る縁で影してすせと通り二糸をうく二糸をうく
とて糸の糸を糸の身代す知でまのるも別六とちよと
糸して古禮文の懸合うく殺を突りく館を吹か
懐八別六らの世もくの罪を忘りのちあせ薦み成る

死んでとつて二葉屋の家を再興の時節とらふ附て
此後を以て方りから二葉屋人三百支かみて是まで
勤めて居ると慥なる者を支配人あり預け二葉屋
と赤花の里と一初め糸と配偶せ二人が中の子を以
て二葉屋の家智人と定むべし赤河津川町の赤花
おるが母お初め糸の爲めお母方の祖母あまを二
葉屋の主人引とく其の糸端と爲まべし又二葉屋
も自己の地面の田めて是を配入とて子孫傳へる株
が賣りのおとこのを賣て是とくくすをその地の益
者のおとこのやが振振と居て是とくくすを夫と取
り持て居るくく女房ありて是堅きおとこのを
うと流石お榊の猪右衛門が何れも何れも残るか
あまをくくすくくくひお初め糸お花のえ糸馬糸の糸
ひ大方ありて此思ひ一回おの樓の酒宴お事それ
諸その翌日より馬楽が周旋めく香度屋の方の
掛合すとお花のト先ウ二葉屋の見世の出る

勝右衛門が
大通り
栄家の
栄へ
居らく



まてとそ江戸屋えどやが小梅こうめの別荘べつしやうに移りうつり始めてはじめて安堵あんど
の効きとありたりありたり然さるにに初はつめ界かいも日毎ひごとに別荘べつしやうへ出で
来きりお性しやうあわねまの情じやうのたのしみたのしみの多おほうらわお花はな
が孝かうと貞実てんじつとを夫つまより褒美ほびの恩賞おんじやうある人ひとに初はつ
め界かいの一日いちにちお花はなを連つれて前まへの人ひとを穿せん鑿さくする
ふまにふ花はなが母ははのお照てんが墓はかへ糸物いとものあり寺てら治ちと情じやうとて
叮嚀ていねいふ法はふ車ぐるまを遠とほげ且かつ墓はか石いしとくくの美うつくしく建たん
とを能よくせし後のち再びまた別荘べつしやうへ戻かへらんとせしなふて回まわり

伴ばんる小赤こせき殺ころさる色いろくつとくを食くらひの性しやう例れいれありお花はな
の何なに心こころ多くおほく薦すすの搦なまこころあより其その旅りよををつるまををはる
母ははの業わざをとつえ且かつ我われが弟あにの祝いわい判はんをを押おして青柳あおやなぎ川がは岸ぎし
の香か庭にわ屋やへ賣うる備ひ医い者しや者しや灸しゆ灸しゆありけしをを初はつめ
界かいが袖そでををひきこころのより影かげけしをを初はつめ界かいも業わざの
報むかひの觀み面めんあるふお花はなどろき候さう已いれとと報むかひと
を初はつめ界かい二葉ふたは屋やの家いへの再また出で来きふより是こゝをを初はつ
め界かい一いち葉は道みち者しや日ひとをを穿せん鑿さくするお花はなを遠とほへ初はつめ界かい

妻と定め其日より義丈嫁りゆく後屋の身代と信を
務めぬつ小梅の別荘へお名を連れて隠れせし其後
お名を孕めるとありて玉の如き男子を産むる故
初め界大り小梅に務めぬつお名をて丈と自己が子と
ぬ一夜お名と号けし又お名を力とお名とが申し出来
し由男の子ありける故務めぬつお名をて之を二系
屋の家督人と定めけしを女家にも血脈を以て相
續し初めお名とお名が中へ出来しるこの男の事

お名は花の祝ある後屋清八の家にも最後大御と建
させし由徳馬承の樂花と改名し美配人を兼侍合
系屋の見世と株として務めぬつより貴ひのをたらし
ず彼の作振の辨別をききき柳川岸あるお名を文
房お名ひ文端様ひ文者の果とく人愛相もく
づるお名を別深のえ来遊くと入り来る客お名は日橋の
繁昌是すく男女の子を儲けり然し悪とあり
たる二系屋の女房お名伴頭清八お名は別六お名

婆ア貪とんさ放はなるどいちりを食たとありある人ひとを非業ひごうの死し
 をいいくく人ひとの徒とのと死しを妬ねたむ初はつめ家け馬ま未みまを男おとこ
 女め市いちままこの子こを殺ころす家けつつと栄さかへて緋ひの傍そば未みるわ
 正道しんどうと守まもることを天てん乃のうの賞しょう一いつのひとるるはあるるとあるるが
 必かならず成なりるるのあのあ娘むすめ直ただ子ことあるるのあ初はつめめ善ぜん事じとあるる人ひと
 未み繁はん昌しょうの僕べが徳とく念ねんままするるとあるるやあまま例れいてまうす

淀西曙第五編卷之下 六尾

